

## 第2回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

### 選考結果

第2回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第110号、111号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、木下慎会員の「千葉命吉の初期教育思想―「生の哲学」の影響に注目して―」（『教育哲学研究』第110号所収）を受賞作として選定した。

### 授賞理由

木下論文は、「八大教育主張」の主張者の一人として知られる千葉命吉の思想を、ニーチェ、ベルクソンらの「生の哲学」と関連づけて批判的に分析したものである。千葉の「一切衝動皆満足論」は、問題解決へと向かう生命の内的な合理性を基盤に、対立する諸衝動の連帶的・調和的な実現を目指すものであった。しかしそれは衝動満足を必然化し、千葉自身が重視したはずの抑圧された衝動の存在を否定する結果をもたらしていた。こうした転倒が生じる根源を、木下会員は生命の潜在性の次元をめぐる千葉の思想に探っている。千葉は、子どもの未熟性を欠如としてではなく可能性と捉えるが、こうした潜在的な可能性を現働的な次元に引き上げることに教育の使命を見ていた。このため、ベルクソンの影響を受けて生命の潜在性の次元に気づいていながら、千葉は教育を現働的な活動の次元へと収斂させてしまう。結局、千葉は潜在性の次元が持つ独自の意味を教育のなかに位置づけることができなかったのである。

このように、木下論文は、名前はよく知られながらこれまで取り組まれることの少なかった千葉の思想を対象として、その限界を鮮やかに浮き彫りにしつつ、現代的なアクチュアリティをそこに見出すことに成功している。その際に木下会員が準拠とするのは、ドゥルーズがニーチェ論とベルクソン論において展開した〈潜在的／現働的〉という概念枠組みである。ニーチェとベルクソンへの依拠という共通性に着目して、戦前日本の教育実践家である千葉と現代フランスの哲学者ドゥルーズを対峙させるその試みは、いささか唐突である。思想史的文脈をより詳細に参照することが望まれるであろう。しかし木下会員のこの試みによって、千葉の思想は一挙に現代的な文脈に組み込まれ、同時に、現代的文脈それ自体が、生命の潜在性から目をそらして現働性にのみ着目する教育論の趨勢として、新たな相貌のもとに捉えられることになった。

木下論文は、教育実践家の思想の教育哲学的解釈に一つの可能性を示したのみならず、過去の思想と現代的文脈をいかに架橋するか、という方法論的な側面においても、教育哲学研究の可能性を広げるものとして評価できる。

以上から、理事会では木下慎会員の論文「千葉命吉の初期教育思想―「生の哲学」の影響に注目して―」を第2回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。